

## 庾信「郷關の思」について

高 木 重 俊

庾信（五一三—五八一）の詩風は、彼の四十二歳のときの人生における重大な轉機に従つて二期に分けて論ぜられるのが普通である。即ち南朝梁に仕えて禁闈深く出入し、皇族の厚い恩寵を被つていた前半生に、宮體詩全盛の風潮の中で特に「徐庾體」と別稱される「綺艷」の詩風を誇つていた時期と、梁末の動亂の際に北地に逃れ、祖國の滅亡後も西魏・北周に仕えて顯達の道を歩んだ後半生に、公式の席では相變わらぬ宮體詩風の王朝賛歌を奉りながらも、自己の感懷を謳う詩には時として「悲涼」の響きを漂わせる時期とである。この後半生における「悲涼」の響きは、庾信自身の悲哀感情から生まれるものであるが、北周書四一本傳には、「（庾）信雖位望通顯、常有郷關之思、乃作哀江南賦、以致其意。」と記述するように、從來から「郷關の思」ということばで説明されてきた。

また、△擬詠懷▽二十七首は、庾信の詩の中で最大の連作であるが、清の倪璠はこの詩に、「皆在周郷關之思、其辭旨與哀江南賦同矣。」と注して、この作品が彼の「郷關の思」を最も端的に表現していると見ている。

私はこの小論で、北朝における庾信の文學に新生面を開かせる原動力となつた、彼自身の悲哀感情「郷關の思」とはいかなる内容を包括するものであり、またそれが彼の詩においてどのような役割を果たしているかということについて、△擬詠懷▽詩の分析を中心としながら考えてゆくつもりである。

△擬詠懷ⅴ其一は、この連作全體を總括する序としての性格を持つている。

歩兵未飲酒 歩兵 未だ酒を飲まず

中散未彈琴 中散 未だ琴を彈かず

索索無眞氣 索索として眞氣なく

昏昏有俗心 昏昏として俗心あり

涸鮒常思水 涸鮒 常に水を思ひ

驚飛每失林 驚飛して毎に林を失ふ

風雲能變色 風雲 能く色を變し

松竹且悲吟 松竹 且つ悲吟す

由來不得意 由來 意を得ず

何必往長岑 何ぞ必ずしも長岑に往かん

この詩で庾信自身は、「酒を飲まない阮籍」、「琴を弾かない嵇康」として位置づけられる。そして阮籍・嵇康の存在の本質であり象徴でもある「眞氣」はなくなり、「俗心」を抱いて昏迷している、と謳うこの比喻は、庾信自身の本來の存在の姿が失われたことを物語っている。

鮒が鮒として生存できる基盤（水）を失い、鳥が鳥として生存できる基盤（林）を失つたように、彼自身もまた人間庾信として誇らかに生きることができる基盤を失つてしまつたのである。その原因は七・八句に見られるように、梁末の動亂の際に北朝（西魏―北周）に抑留され、節を曲げてかつての敵國に仕えていることにある。九・十句では後漢の崔駰の故事（<sup>2</sup>）を引いて、故國を遠く離れて「意を得ない」ままに長安に寄寓している身の上を表現している。晴れやらぬ心を抱きながらも崔駰のように官を辭して故郷に歸る自由さえない庾信は、△擬詠懷ⅴ其四で、

惟彼窮途慟 彼の窮途の慟を惟ひ

知余行路難 余の行路の難きを知る

とうたい、過去の榮光は追うべくもなく、さりとて將來の展望とてなく、自分の意志ではどうにもならない行きつまりの境遇を、車を走らせては道の行きどまりで慟哭したという阮籍の心情に託している。

また八其十八Vではこう謳う。

尋思萬戶侯 萬戶の侯を尋ね思へば

中夜忽然愁 中夜 忽然として愁ふ

琴聲遍屋裏 琴聲 屋裏に通く

書卷滿牀頭 書卷 牀頭に滿つ

雖言夢蝴蝶 蝴蝶を夢むと言ふと雖も

定自非莊周 定と自らは莊周に非ず

殘月如初月 殘月は初月の如きも

新秋似舊秋 新秋は舊秋に似たり

露泣連珠下 露泣きて連珠下り

螢飄碎火流 螢飄りて碎火流る

樂天乃知命 天に樂しみて乃ち命を知り

何時能不憂 何れの時か能く憂へざらん

——身は異國に寄寓し、身を捧ぐべき祖國はすでに亡んだ。憂いを慰めるものはただ琴と書のみ。莊子のように自由豁達な心を持ちたくとも、それもかなわぬ。——

この詩においても、祖國の滅亡を傷む庾信の心情が切々と謳われている。七、十句は、秋の殘月を見てみると、もしかしたらこれが初月となつて再び過去の榮華の時が訪れるのではないかという幻覺にとらわれ、やがて往年に比べて何の變哲もないわが老境を自覺して、それが再現不可能な幻想であつたことを悟り、涙に咽びつつ搖れ動く自己の悲哀感情を、「露泣連珠下、螢飄碎火流」という感覺的な表現に象徴させたもののように思われる。

さらに「其八」では

空營衛青塚 空しく衛青の塚に營し

徒聽田橫歌 徒らに田橫の歌を聽く

と謳つている。「田橫歌」とは、漢の田橫が自殺したとき、門人がそれを傷んで悲歌を作り、李延年が後にそれを分けて「薤露」／＼「蒿里」の二曲にしたと言われるが、つまり挽歌のことである。倪璠は「古今注」からこの記事を引用したあと、この二句に「言已不能如衛青之征戰起塚廬山、又不能學田橫五百人俱死海島也。」と注して、故國のために武功もたてられず、さりとて國難に殉ずることもできなかつた後悔自責の表現と解釋するのであるが、私にはむしろ、故國の滅亡とともに消え去つた過去の榮光の墓の傍に額づいて、生きながら挽歌を聞いているという、庾信の心情を象徴的に表現したものと見る方がよいように思われる。

この、「生ける屍」という意識は、「慨然成詠」の詩にも見える。

新春光景麗 新春 光景 麗しく

遊子離別情 遊子 離別の情あり

交讓未全死 交讓 未だ全くは死せず

梧桐唯半生 梧桐 唯だ半ば生けるのみ

值熱花無氣 熱に値ひて花に氣なく

逢風水不平 風に逢ひて水は平かならず

寶雞雖有祀 寶雞まつ祀らるる有りと雖も

何時能更鳴 何れの時か能く更に鳴かん

——新春の光景はいかに麗しくとも、長安に寓居する旅人のわが身には、離別の悲しみしか感じられない。死せるにあらず生けるにもあらず、交譲や梧桐の木々の、半死半生の姿と同じ身の上である。熱にあてられて花が香を失い、風にあおられて水が波だつのは、まさにわが境遇のことかと疑われる。異朝に仕える自分は、秦に獲われた寶雞のようなもので、いくら祭つてくれたとしても、もう二度とのびやかに鳴くこともできないのだ。——

北方の冷厳な大自然の中で、久々に巡つてきて人の心に暖かさを與えてくれるはずの春も、庾信の心の悲しみを和らげてくれるものではなかつた。△和庾四▽の詩でも、

離關一長望 關を離れて一たび長望すれば

別恨幾重愁 別恨 幾重にも愁ふ

無妨對春日 春日に對するを妨ぐるもの無けれども

懷抱只言秋 懷抱こころは只だ秋と言はん

と、春の季節にありながら「秋の心」を抱いている庾信の肖像を見ることができると、

彼の悲哀は、今までの詩の中に「遊子」「離別」「別恨」という表現があることからわかるように、故郷を遠く離れて長安に寄寓していることから生まれるのであるが、さらに自身が節を曲げたことからくる悲哀も數多く告白される。△其二▽ではこう謳う。

赭衣居傅巖 赭衣して傅巖に居り

垂綸在渭川 綸つるぎを垂れて渭川に在り

乘舟能上月 舟に乗りて能く月に上り

飛轆欲捫天 轆はらを飛ばして天を捫なでんと欲せしに

誰知志不就 誰か知らん志就ならずして

空有直如弦 空しく直なること弦のごときもの有るを

洛陽蘇季子 洛陽の蘇季子は

連衡遂不連 連衡遂に連ならず

既無六國印 既に六國の印なく

翻思二頃田 翻かつて思ふ二頃かの田を

一・二句では、殷の高宗に見出された傳説、周の西伯に登用された呂尙に比して、江陵において梁の元帝に用いられた自己の姿を示し、三・四句では、梁中興の氣概に燃えたことを述べる。五―八句では、後漢の順帝の時に流行した「直如弦死道邊、曲如鉤反封侯。」という俚諺を引いて、梁中興の志も空しく正義は遂に實現できず、自分は蘇秦と同じ役目を背負つて西魏と連衡しようとして使いに發つたものの、努力も空しく西魏は梁を亡ぼしてしまつた、という。「空有直如弦」と俚諺を半分だけ引用している裏には、「曲」なる自分、つまりかつての敵國に仕えて高祿を食んでいる彼自身の姿が自虐的に隱喩されている。彼はもはや連衡して秦に仕えることもできず、合縱して秦を攻めることもできない。旅の空にあつて故國の幻影（「二頃田」）を追つているのみなのである。

このように自己の變節を恥じ嘆く表現はまだ至る所に見えるが、士大夫としての倫理を踏みにしり、自分はもう君子として誇らしく生きることはできなくなつたのだ、という感慨が、彼に哀愁の影をもたらずのである。

さらに、八其十Ⅴでは蘇武と李陵、荆軻の故事に託して、二度と歸ることはできなくなつた故國への永訣の情を述べているが、今まで述べてきたように、故國の滅亡と流寓の生活——この世に心から満足して身を置く場所はないという事實

認識が庾信の悲哀の根底にあるわけである。繁榮の故國がすでに過去のものとなつてしまつたからには、彼の追憶が幻影となつた過去へ溯行してゆくのも當然なことである。彼の告白する悲哀感情のほとんどが故國の滅亡という歴史的事實に根ざしているがゆえに、それは從來から「郷關の思」と呼ばれてきたのである。しかしこれは、動亂の中で木の葉のように翻弄されて異國に漂着したという庾信の經歷——いわば外面的な事蹟からの評價であるように思われる。

私はさらに、彼の心情の内面から、「郷關の思」——過去の幻影に對する追憶の心情を採つてゆきたいと思う。

## 二の二

△擬詠懷▽其九では次のように謳う。

北臨玄菟郡 北のかた玄菟郡に臨み

南戍朱鳶城 南のかた朱鳶城を戍る

共此無期別 共に此れ無期の別れ

俱知萬里情 俱に知る萬里の情

昔嘗遊令尹 昔嘗て令尹に遊びしに

今時事客卿 今時は客卿に事ふ

不特貧謝富 特だに貧の富を謝らざるのみならず

安知死羨生 安んぞ知らん死の生を羨むを

懷秋獨悲此 秋を懷ひて獨り此に悲しむ

平生何謂平 平生 何をか平と謂はん

一—四句までは、自分が永遠に再會することはできないであろう南の故郷を離れて、遠く北の異郷に身を置くことを述べたものである。五・六句は、かつては楚の令尹の門に遊ぶがごとく梁の元帝に仕えたが、今では秦の客卿の官に仕える

ごとく北周の祿を食んでいと述べる。そして八・九句は、倪璠が「非惟不慕富貴、并不樂生也。」と注していることから、「貧賤に甘んじて富貴を謝しよぞけるというわけではないし、死ぬ方が生きているよりもよいと思うわけではない。」という意味に解釋できる。つまり、「豊かに生きたい。」という願いを表現したものと讀める。彼は北周においても富貴の地位に身を置いていたわけであるが、家郷を遠く離れ、歸るべき祖國も亡び、さらに變節という自意識がつきまとう精神状態では、心からのびやかに生を樂しむことはできない。だから九・十句の悲哀も、その願望の崩壞から發生しているのである。「懷秋獨悲此」の「此」とは、晴れやらぬ心で北朝に仕えている老境の現在ということであろう。

「豊かに生きたい」という願望の崩壞を嘆く心情は八其二十四にも見える。

無悶無不悶 悶んえ無からんか 悶んえざるは無し

有待何可待 待つ有らんか 何をか待つべけんや

昏昏如坐霧 昏昏として霧に坐するが如く

漫漫疑行海 漫漫として海を行くかと疑はる

千年水未清 千年水未だ清すまざるに

一代人先改 一代にして人先づ改まる

昔日東陵侯 昔日の東陵侯も

惟有瓜園在 惟ただ瓜園の有ることあ在るのみ

七・八句は、秦の東陵侯召平が、秦の亡んだのち布衣の身となつて長安の青門の外で瓜を栽培したという故事を踏まえ  
たものである。阮籍の八詠懷其六にもこの故事が引かれていて、

昔聞東陵瓜 昔は聞く東陵の瓜

近在青門外 近く青門の外に在りと

.....

布衣可終身 布衣こそ身を終ふべけれ

寵祿豈足頼 寵祿は豈に頼むに足らんや

と、東陵侯として寵祿を被つていた過去よりも、ひとりの人間召平として瓜作りを生業なりわいとして生きる方が、はるかに人間的に誠實であると述べている。

庾信の場合はどうか。五・六句の「千年水未清、一代人先改」という表現は、人間の運命の轉移しやすいことを意味しているのであるが、その轉移した結果が東陵侯の故事に託されているものなのである。つまり、東陵侯が富貴の身から貧賤の境遇に轉移した事實に、自身の境遇を比喻しているわけである。自己の幸福の不幸への轉移が、一句の「無不悶」という心情を呼び起こし、二句の「何可待」という、幸福への再轉移は期待できないと自覺するときの喪失感・虚脱感が、三四句の「昏昏如坐霧、漫漫疑行海」という感覺的な表現を生んでいるのである。

さらに、死に對する恐れ的心情が八其二十Vの中に見える。

在死猶可忍 死に在るすら猶ほ忍ずべし

爲辱豈不寬 辱しめ爲るるは豈に寬ならざらんや

古人持此性 古人此の性を持し

遂有不能安 遂に安んずること能はざるものあり

其面雖可熱 其の面は熱すべしと雖も

其心長自寒 其の心は長しへに寒し

匣中取明鏡 匣中より明鏡を取り

披圖自照看 圖を披ひらきて自ら照らし看るに

幸無侵餓理 幸ひに餓を侵す理なきも

差有犯兵欄 差<sup>や</sup>兵欄を犯すことあり

擁節時驅傳 節を擁して時に傳を驅くるも

乘亭不據鞍 亭に乗ずるに鞍に據らず

代郡蓬初轉 代郡蓬初めて轉じ

遼陽桑欲乾 遼陽桑乾かんと欲す

秋雲粉絮結 秋雲粉絮のごと結び

白露水銀團 白露水銀のごと團まる

一思探禹穴 一たび禹穴を探らんと思へど

無用擣臯蘭 用て臯蘭を擣することなし

「死さえ忍ぶことができるのだから、生き辱を耐え忍ぶことができないわけはあろうか。」という冒頭の述懐は、このあとの「しかし昔の烈性を持った人々は辱しめられることに安んぜず、むしろ死を選んだ。このことを考えると、自分は赤面の思いがする。」という、自分が戦亂の中で祖國と命運をともしることができず、しかも祖國を亡ぼした敵國に仕えて高祿を食んでいることから發する自虐的な羞恥の心情の告白を打ち消してしまふほどの強い響きとともに語り出される。さらに、「其面雖可熱、其心長自寒」の二句に對する倪璠の注は、「慚已面雖可熱、而心寒如水、異於熱中者也。」とあり、この注によれば「顔面は慚愧の心情のために眞赤であるが、心中は水のように冷え冷えとしている。」という意味に解釋できる。「史記・荆軻列傳」で燕の鞠武が秦の脅威を述べることばに、「足爲寒心。」とあり、「史記索隱」では「寒心」の語に對して、「凡人寒甚則心戰、恐懼亦戰、今以懼譬寒、言可爲心戰。」と注している。

庚信の「其心長自寒」という表現も、「心の戦き」という方向で解釋してよいであろう。とすれば、「戦き」の原因は一

句からの續き具合から判断して、「死」ということになる。八其九Vの「何知死羨生」(死んで忠節を盡くす方が生き恥をさらすよりもよいと思うわけではない。)という心情が、この詩にも表われていると私は考へる。

そしてその後で、「鏡で自分の顔を見ると、餓死の相はないが兵死の相が見える。しかし自分は節を擁して出使して、たために、直接には戦いに参加することはできなかつた。」と述べ、續いて秋の風景を敘して衰老の身を暗示したのち、「今ではもう老いさらばえて、戦場に立つことはできなくなつた。」と述懐するのは、死を恐れ、節を曲げてまで生に執着した彼自身の行動を辯護し、羞恥の心情を合理化するものなのであろう。

かつて建康令として朱雀門防衛軍の指揮をとつたとき、逆賊侯景の軍兵が姿を現わすや軍を棄てて逃亡し、また江陵で元帝との間が險惡になると、讒せられて死を待つことを恐れて西魏に旅立つた庾信の、死を恐れる心情がこれらの詩の中に表われているのである。

このように見ると、國難に殉ずることはできずに生き恥を曝している身を羞ずる心情と、死を恐れあくまで生に執着する心情とは明らかに矛盾している。しかし、死を恐れ、豊かに生きたいと願う彼の心情がある限り、前章で述べた庾信の變節に對する自愧自責の心情の告白の裏には、彼自身の生命存在を危うくし、さらに彼自身の現在の存在を否定するほどの、深刻な倫理喪失の自己認識はなかつたのではあるまいか。

小尾郊一氏は、ともに西魏に抑留された殷不害が「疏食布衣」「枯槁骨立」のありさま(陳書三二)であつたのと比較して、西魏から北周へと王朝は遷つても依然として顯達の道を歩む庾信の「順應性」を説かれて<sup>(3)</sup>いるが、この「順應性」の裏づけをなすものが、死を恐れ、豊かに生きたいと願う彼の心情なのであろう。

庾信の意識の中に彼の現存在を否定するほどの深刻な倫理喪失感がなかつたとすれば、彼の悲哀感情「郷關の思」は、祖國梁の滅亡という國家的な大事件によつて觸發されているというよりも、より直接的にはむしろ祖國の滅亡による自己の幸福の喪失という、付隨的な、あるいは個人的な事情に根ざしていると言えよう。

庾信の青年時代、梁では皇太子となつた蕭綱のサロンを中心に宮體詩が全盛を極めていた。豪莊な宮殿と廣大な庭園、その中で繰り廣げられる典雅な園遊。華麗な雰圍氣の中で文學はますます綺麗になつていつた。庭園が大自然の美を縮小模倣して人工的に構築されたものであるのと同じく、その世界で作られる文學も、觀念的に美的世界を構築したり、作爲的な悲哀を吐露してその技巧と迫眞性を競うなどといった社交性と遊戯性をますます強めていつた。このように、宮體詩が觀念的に美的空間を造型するという點（たとえ造型される情景が、實景描寫をもとにしてその中の美的感興を誘う素材を再構成するものであつても、また最初から觀念的に美的情景を構成するものであつても）からすれば、宮體詩は「觀念的再構成の美學」と呼ぶことができよう。

この宮體詩の發想は、美的世界の造型だけでなく、感傷世界の造型にもつながる。梁朝文壇における閨怨詩・怨情詩は快樂美の世界と感傷美の世界とを組み合わせたところに成り立つていたものである。

「徐庾體」と別稱される宮體詩の旗手のひとりとして名聲を恣にした庾信の作詩の發想は、北朝に選つても變化してないといふと私は考へる。

それは、公の場において王侯貴族に贈答奉和する詩のほとんどが相變らずの綺麗さを誇つてゐるからであり、また彼の庇護者のひとりであつた北周の趙王（宇文招）の傳にも「學庾信體、詞多輕艷」と記録してゐるし、さらに「悲涼」の響きを漂わせて悲哀感情を告白する詩における情景も、意圖的に構成されたものが多い、ということなどからである。例えば、△別張洗馬樞▽では、

別席慘無言 別席慘として言なし

離悲兩相顧 離悲兩とに相顧る

君登蘇武橋 君は蘇武の橋に登り



向鏡絶孤鸞 鏡に向かひて孤鸞を絶つ 〱其二十二〱

胡笳落涙曲 胡笳は落涙の曲

羌笛斷腸歌 羌笛は斷腸の歌

纖腰減束素 纖腰束素を減じ

別淚損橫波 別淚横波を損ふ 〱其七〱

という表現は、閨怨詩の發想によるものなのであろう。このように、北朝における庾信の詩が「悲涼」の雰圍氣を漂わせるようになって、宮體詩の發想は依然として大きな影を落としていると考えなければならぬ。

〱擬詠懷〱連作二十七首は、庾信の感傷世界造型の代表的なものであるが、それでは今まで述べてきた「郷關の思」は彼の感傷世界の造型にどのような役割を果たしているのであるうか。

思うに、「郷關の思」は、彼自身の原體驗として活用すべき、彼の文學の素材としての役目を持つていたのではなからうか。北朝において鬱々として樂しめぬ庾信の心情は、過去の榮光の時に向かつて溯行し、その「郷關を思う」ときに湧き上ってくる哀愁の心情となつて感傷空間を造型し、その中で自己の悲哀感情を低徊させていたのではあるまいか。

〱擬詠懷〱の中で、彼はしばしば双擬對を主とする反復表現を用いて、自己の悲哀感情を屈折させて表現しているが、その悲哀感情はすべて「郷關の思」に關係するものである。

寓衛非所寓 衛に寓するも寓する所に非ず

安齊獨未安 齊に安んずるも獨り未だ安んぜず 〱其四〱

惟忠且惟孝 惟れ忠にして且つ惟れ孝たり

爲子復爲臣 子爲り復た臣爲り 〱其五〱

吉士長爲吉 吉士は長しへに吉爲り

善人終日善 善人は終日善なり 〱其十四〱

殘月初月 殘月は初月の如きも

新秋似舊秋 新秋は舊秋に似たり 〱其十八〱

無悶無不悶 悶えなからんか 悶えざるはなし

有待何可待 待つあらんか 何をか待つべけんや 〱其二十四〱

また對句にはならないが一句のみの、

連衡遂不連 連衡遂に連ならず 〱其二〱

平生何謂平 平生 何をか平と謂はん 〱其九〱

という例がある。このような反復表現は、梁代においてにわかに盛んになったものであり、宮體詩の盛行と關係のあるものであるが、それらはいわば遊戯的なものであり、屈折的な表現効果をねらったもののように思われる。庾信の詩賦中にはまだ他に、このような反復表現が見られるが、これらはすべて悲哀感情を告白する作品にのみあらわれる。庾信は意識的にこの反復表現を用いて、自己の矛盾する悲哀感情——國難に殉することもできず生き長らえている羞恥の心情と、それをうまわるほどの生きることへの執着の心情——をむしろ遊戯的・屈折的に表現しているのではあるまいか。感傷世界の中で悲哀感情を低徊させていると前述したのは、この意味においてである。

ともあれ、「鄉關の思」は、北朝に遷つても相變わらず宮體詩の發想をとる庾信の文學に、「悲涼」という新しい分野を開かせる素材となつた。彼は「鄉關を思う」ときに湧き上る悲哀感を、遊戯的屈折的に（従つてそれは却つて自虐的に）表現する。さらに彼は歴史上の故事を巧みに驅使し、故事の持つイメージと自己の感情とを二重映しにして、間接的に表現する。彼が決してはらわたの裂けるほどの悲吟を見せないのは、これらのことに由来しているのである。

これまで私は、庾信の「郷關の思」の内容とその役割について述べてきた。「郷關の思」とは、故國の滅亡とそれにもなう庾信の幸福の喪失——南朝から北朝へという經歷と、繁榮の過去への追憶——ということに關する庾信の心情のすべてを包括するものである。しかしこの「郷關の思」は、故國の滅亡を傷むというよりも、むしろそれによつて彼自身の幸福が崩壞したという認識を主動機として告白されているように思われる。彼は「郷關の思」に託して、しばしば自己の變節を悲しんでいるが、死を恐れ、豊かに生きたいという願望が彼の心底にある以上、その變節の自意識は生命と地位とを賭してまで自己の身を嘔み慟哭するほどの深刻なものではなかつた。にもかかわらず彼が繰り返して「郷關」をうたうのは、それに託して北地における鬱々として樂しめぬ心情を述べんがためであつて、彼はそれを原體驗として彼の文學に新しい面を拓いていつたのである。△擬詠懷▽其一では、「涸鮒常思水、驚飛每失林」と、生活基盤を失つた鮒と鳥とに自己を比していたが、自分が自分らしく生きる基盤は失われたという自覺があつてはじめて、作家庾信が誕生したと言えよう。彼をして作家たらしめた文學上の大きな素材——それが「郷關の思」だつたのである。しかし、「郷關の思」が彼の意識の中であまりに大きな比重をしめたためか、彼の△擬詠懷▽詩は、それを原體驗とする、いわば私小説的な述べに終つてしまつてゐる。阮籍の△詠懷▽詩が、個人的哀歡を吟詠の對象とする從來の詩の流れから脱脚して、廣い視野に立つて人間社會全體にわたる問題を普遍的に形象化するのとはまさに對稱的な方向に進んでしまつたのである。

注

- 1 彼の庇護者であつた趙王（宇文招）、滕王（宇文逌）ら王侯に唱和する詩は集中に多數あり、おおむね綺麗である。
- 2 崔暉は、權力をかさに專横をきわめた上官の賢憲に諫言したが聞き入れられず、かえつて樂浪郡長岑縣の長官として出向させられたが、遠地でもあり心が晴れず、官を辭して家郷に歸つた。（後漢書五十二）
- 3 「遂令忘榮操、何但食周微」△謹贈司空淮南公▽、「故人儻相訪、知余已執珪」△對宴齊使▽、「避讒猶采葛、忘情遂食薇」△擬詠懷▽其二十一などをはじめとして隨所に見られる。

4 小尾郊一氏「庾信の人と文學——『江南を哀しむ賦』を中心として」（廣島大學文學部紀要二三—三）に詳しい論述がある。

5 前掲の小尾氏論文。

6 鈴木修次氏「初唐詩における反復表現の技巧について」(日本中國學會報十四集)に詳しい論述がある。

7 この他に、「昔爲人所羨、今爲人所憐、世途且復旦、人情又又玄、……、定名於此定、全德以斯全」△傷王司徒褒▽、「有菊翻無酒、無絃則有琴」△臥疾窮愁▽、「從官非官、歸田不田」△傷心賦▽のような例がある。庾信が擬した阮籍の△詠懷▽詩中にも、「一朝復一夕、一夕復一朝」△其三十三▽、「一日復一朝、一昏復一辰」△其三十四▽、「有悲則有情、無情則無悲」△其七十▽の例がある。前二例は反復表現によつて、朝から夜、夜から朝と繰り返して流れてゆく時間の推移を表現することく思われ、後一例は矛盾する自己の悲哀感を屈折的に表現することく思われる。庾信の反復表現はこの後者の例に倣つたものと考えられる。

8 吉川幸次郎氏「阮籍の『詠懷詩』について」(中國文學報、第五・六冊)による。(都立府中高校)